

## 女性に対する暴力としてのポルノグラフィ

——8-90年代の女性運動は何を主張しようとしたのか——

首都大学東京大学院 樋熊亜衣

### 1. 目的

第二波フェミニズムの流れの中で、ポルノグラフィは「女性に対する暴力」と位置付けられ、批判の対象とされた。1980年代の日本においても、そうしたフェミニズム的な視点からポルノグラフィ批判運動が行われた。それを中心的に担っていた団体として、「国際婦人年をきっかけに行動を起こす女たちの会（以下、行動する会と省略する）」が挙げられよう。行動する会は、「ポルノグラフィの問題性を考える集会を開催したり、……活発な活動を展開した」（守如子 2010:8）。しかしこうした精力的な活動があったにも関わらず、「ポルノグラフィの深刻な問題性は、多くの人々に潜在的には意識されながらも、大体において見過ごされてきた」（中里見 2007:4）。

筆者は「ポルノグラフィは女性に対する暴力である」とは一体どのような主張であったのか、と問いを立てる。本研究では、8-90年代にポルノグラフィ批判運動を牽引してきた「行動する会」の活動に焦点を当て、彼女たちがポルノグラフィ批判を通じて、①何を問題として提起したかったのか、②その問題に対してどのような抗議・要求を行ってきたのかを明らかにする。

### 2. 研究方法

本研究では、8-90年代の行動する会によるポルノグラフィ批判運動の展開を明らかにするため、会が発行していた活動報告を資料として用いる。行動する会とは、1975年の国際婦人年を機に結成された（1996年解散）、女性差別へ抗議し、差別解消を目指したグループである。資料として用いる活動報告は、行動する会の会員へ向けて書かれたもので、会が行ったシンポジウムや企業への抗議に関する報告等が記載されており、1975年の結成時からほぼ毎月発行されていた。本研究では、活動報告の中から、ポルノグラフィを扱った記事を抽出し（=33）、分析を行った。

### 3. 考察

行動する会はポルノグラフィを、性暴力の被害を矮小化させる働きを持つものであり、かつ、それが蔓延しているということは性暴力の被害が矮小化されている社会であることの証拠でもあると、批判した。「アダルトコンテンツ」だけでなく、駅や街中といった公共の場に貼られるポスター等にも、暴力的な性表現や、女性の身体の一部を強調するような（モノ化した）表現が溢れているということを、行動する会は「ポルノの日常化現象」として告発してきた。ポルノが日常化する社会において女性は、自身が性的な視線を送られる対象であると意識せざるを得ない。行動する会は、このことは女性の社会的な生活を脅かすものであり、表現物を規制する/しないという枠を超えた問題、すなわち女性の人権侵害の問題であると主張したのであった。こうした行動する会の運動は、「嫌ポルノ権」運動としてメディアにも取り上げられ、ポルノが日常に溢れている環境に人々の意識を向けることはできた。しかし「嫌ポルノ権」運動として取り上げられることで、行動する会の提起した「ポルノグラフィは女性に対する暴力である」という主張は、単に「ポルノグラフィを見ない権利」を主張していると受け取られ、「有害」図書規制運動の波に巻き込まれてしまうのであった。

### 文献

中里見博, 2007, 『ポルノグラフィと性暴力—新たな法規制を求めて』明石書店。  
守如子, 2010, 『女はポルノを読む—女性の性欲とフェミニズム』青弓社。